

## 中東研究における女性身体の処遇

——「交渉」を鍵とした研究動向分析——

鳥山純子\*

### Perspectives on Female Bodies in Middle Eastern Studies

A Critical Review from the Viewpoint of “Negotiation”

TORIYAMA Junko

#### abstract

In Middle Eastern studies, female bodies—especially the physical and symbolic absence of the female body from public sphere—have attracted special attention as a sign of the region’s particularity. However, as indicated by the great number of veiled women with full makeup who can be seen on the streets in contemporary Cairo, the simple dichotomies of revealing/covered, Western/Eastern, or modern/traditional no longer apply. To seek an appropriate framework that illustrates female bodies, this paper examines (1) two crucial works that traced local perceptions of female bodies in Islamic ideologies and the tribal system, and (2) recent ethnographies of the region with regard to female bodies, particularly that of Egypt, by shedding light on “negotiation” as a key analytical concept. This concept was found to be particularly useful for illustrating actors’ agencies and diversities, to counter the stereotypical view. Through the discussion, a common problem became apparent in the studies—the bias of viewing female bodies by only considering their sexual organs or functions. To avoid reproducing such a stereotypical view, one needs to be aware of the bias and its constructive nature in not only local perceptions but also academic perceptions.

Keywords : Female body, Negotiation, The Middle East, Sexuality, Gender

#### I 問題の所在

「ベール<sup>1)</sup>からの解放は、化粧品や、手の込んだ髪型や、流行の服装によって女性たちが自分自身を魅力的なものとして披露できることを意味している」[Hussain and Radwan, 1984: 58]。この文章は1984年、イスラームによる女性身体の抑圧とその解放の必要性についてフセインとラドワンが書いた論稿からの引用である。化粧、流行の髪型、ファッションがベールと対置され、前者が女性身体の解放とされるのに対して、ベールはその抑圧とみなされる。フセインとラドワンに限らず、ハーレムやベールに代表される女性の物質的、象徴的隔離を女性の抑圧と関連づけ、この地域固有の文化として扱う傾向は、現地の言説だけでなく、女性の身体を扱った研究——その多くがジェンダー研究者によって担われた——にも色濃く受け継がれてきた [Mehdid 1993]。

しかし中東における女性身体に関わる現象は複雑さを増し、そうした解釈ではとても捉えきれない。カイロ

---

キーワード：女性身体、交渉、中東、セクシュアリティ、ジェンダー

\*平成17年度生 ジェンダー学際研究専攻

では、一度は消え行くとされたベールが70年代以降積極的に着用され、新たにベールを手にする女性の数は増加傾向にあるという [Egypt Today 2003]。他方、エジプトの化粧・衛生産業は、90年代以降高い成長率を見せている。売上高は1997年からの8年間で、60%増加し、2005年には31億4千390万エジプトポンドを記録した [Euromonitor 2000, 2005]。現在のカイロでは、フルメイクとベールを同時に楽しむ女性も多い。こうした動きは化粧等をベールと対置させる従来の認識に再考を促し、東洋や西洋、伝統や近代、後進と進歩という二項対立的で単純な分析を拒絶する。

こうした現実をどのように読み解き、いかに描写するべきか。本稿ではその手がかりを、中東の女性身体を扱った先行研究のレビューから模索する。その際、個人の主体性や意図の重視、現象の多様性の記述が試みられるなかで中東ジェンダー研究でも注目された「交渉」概念を軸に、その多義性と多様性に留意しつつ女性身体を扱う議論の動向を整理する。まず次節ではイデオロギーを対象に女性身体を考察した1970年代半ば以降の先行研究を検討し、イデオロギーにおける女性身体の扱いについて考察する。そして第3節では、エジプトにおけるベールや化粧といった女性身体の装飾行為を扱った80年代以降の民族誌をレビューする。

## II イデオロギーに探る女性身体の管理

中東では、女性身体を男性の管理下にあるもののみならず理解が、フェミニストや開発主義者だけでなく、女性身体の管理を擁護し奨励しようとするイスラーム指導者やイスラーム主義者らにも共有されてきた<sup>2)</sup>。しかし70年代半ば以降、女性身体の管理を男性による女性抑圧の象徴と捉える理解に抵抗し、女性の主体性を重視し現地の論理からジェンダー<sup>3)</sup>を記述する試みが行われた。本節では、イスラームイデオロギーや部族社会規範を考察し、中東の男女関係の理解を試みた研究を検討する。

### 1 フィトナ回避を目的とする女性身体の隠蔽

中東における女性身体を論じる上で多くの論者に引き合いに出されるのが、モロッコ出身の社会学者で中東のフェミニスト論客として知られるメルニーシーである。彼女は著書 *Beyond The Veil* において女性の社会進出における課題の検討と称してムスリム世界における男女関係を説明し、ベールやハーレムは社会的秩序維持のための手段であり、そこで目的とされているのは女性セクシュアリティの管理だと述べた [Mernissi 1975]。メルニーシーによれば、ムスリム世界では、男性が抗うことのできない魅惑が女性にあり、女性セクシュアリティこそがその源とみなされた。抵抗が不可能なことから、セクシュアリティは社会秩序に対する最大の脅威とみなされ、それとの深い関わりにより、女性の存在はフィトナ (*fitna*)、すなわち混乱や騒乱そのものとみなされてきたという。さらにメルニーシーは、女性セクシュアリティがもつ破壊的な力 (*destructive power*) を管理・規制する試みは、フィトナへの抵抗であり、ムスリム社会における全ての組織の目的であったと主張する。メルニーシーによれば、ベールの着用や外出の規制で女性を社会的に隠蔽しようとする行為も、女性というフィトナ＝騒乱を管理する試みなのだという。

### 2 貞節の表明としての女性身体の隠蔽

一方、女性の身体管理の根拠を部族社会の論理に探ったのがアブー＝ルゴドである。エジプトの西方砂漠に居住する遊牧民、アウラード・アリー部族を対象に調査を行った人類学者のアブー＝ルゴドは、女性の外出や身体露出に課される規制を、名誉 (*sharaf*) と貞節 (*hasham*) という対概念を用いて説明した [Abu-Lughod 1986]。アブー＝ルゴドによれば、ベールや女性隔離は現地のイデオロギー・システムに則って理解されねばならず、アウラード・アリーの場合、彼らが重視するモラル (*'agf*)<sup>4)</sup>・コードの理解が非常に重要である。生理や出産といった女性特有の現象は、モラル・コードが重視する自己コントロールと自発性に欠ける上、性的要素を強く含むとみなされるため、女性はモラル的に男性に劣る存在とされるという。しかしアブー＝ルゴドは、ベールや女性隔離は、メルニーシーが述べたような社会騒乱の回避を目的とするものではなく、女性による自発的な貞節の表明だと主張する。アブー＝ルゴドによれば、女性にとって自らの貞節をアピールすることは、アウラード・アリー部の社会システムを了解していることの表明であり、システムに対する服従の表現であり、社会的ヒエ

ラルキーを承認し、周囲の人々の社会的地位や名誉を認めて尊敬を示す行為である。よって、女性が周囲の期待に反し貞節な態度をとらないことは、人々の社会的地位や名誉に挑戦し、社会システムへ反旗を翻すことを意味するという。ここで言う貞節とは、著者によれば、性的関心の否定、親族以外の男性の回避、男性に興味関心を抱かないこと、男性を誘惑しようとしないうこと、そして男性に性的な事柄を想起させないことである。すなわち、ベールや女性隔離は、貞節の表明を目的とした女性たちによるセクシュアリティの拒否・回避であり、こうした行為を通じて女性たちは社会への服従を示すという。セクシュアリティは、それが社会システムにとって脅威とみなされる故に否定的に捉えられ、セクシュアリティと密接に関係するとみなされる女性たちにはそれを拒絶、隠蔽する努力が男性以上に求められる。

### 3 イデオロギー考察の限界、中東型男尊女卑の創出

メルニーシーやアブー＝ルゴドの研究は、非力な抑圧の被害者ではなく、社会的に認められた存在として女性を描く試みと評せられよう。そこでは、西洋中心的な男女観とは異なる、中東、もしくはイスラームに独自の男女観を当事者の言説から提示し、男性による女性抑圧として女性身体の管理をみなす風潮に抗うことが意識されていた [Mernissi 1975: viii]。メルニーシーは女性の身体管理の根拠を女性セクシュアリティのもつ強大な力に辿り、アブー＝ルゴドはベールの着用を女性の自発的行為として描写した。著者らはこうした取り組みにより、当事者の論理を跡付けた。

しかし2つの研究にはよく似た問題がある。どちらの研究でも現地の言説を無批判に分析に持ち込んだため、女性身体の管理の論理が、トートロジーに陥るのである。メルニーシーの議論における問題点は、フィットナという概念にある。メルニーシーは、女性＝フィットナという表現に着目し、女性を騒乱そのものとみなす考え方こそ女性身体の管理が必要とされる根拠であると解釈した。しかし、フィットナとはそもそも内戦、不和、衝突といった広い意味での争い、不信仰、(イスラーム教徒に対する)迫害、誘惑などの事象全般をあらわす定訳が難しい言葉である [Cook 2004]。メルニーシーが言及するフィットナとは、そのうちの宗教的な意味合いをもつ騒乱、つまり人心を神から遠ざける事象全般、言うなればイスラームの教えにおける、悪を表す規範概念と考えられるだろう。すなわち、女性はフィットナとイコールではなく、むしろフィットナという悪の規範概念と関係づけられた具体的な事象の一つと理解できる。またメルニーシーは、女性とフィットナとの混同の理由を女性セクシュアリティに辿ったが、あえてセクシュアリティを根拠としたメルニーシーのこの説明はかえって、女性セクシュアリティを女性の本質とみなし、女性を女性性器に矮小化するメルニーシー自身の偏りをあぶりだす結果を生んでいる。

またアブー＝ルゴドの議論でもセクシュアリティ概念に同様の問題がある。アブー＝ルゴドは、アウラード・アリー社会で女性が男性に劣るとされるのは、社会システムや社会的権威にとって最大の脅威とされるセクシュアリティに、女性はより密接に関係し、セクシュアリティというスティグマが課されるためだと述べる。他方男性の場合、女性を避けることでそのスティグマから逃れられるという。この論理は、アブー＝ルゴドのセクシュアリティ概念が、性的誘惑、および自発性や自立性の欠如という限定的な意味で使われているために成立する。そこで、この文脈におけるセクシュアリティは、メルニーシーがフィットナとして表現したような、悪を表す規範概念と捉えるのが妥当と考えられる。アブー＝ルゴドは、ベールを説明するにあたって「ベールの着用は服従を伝達するが、その際の語彙はセクシュアリティや貞節である」と述べるが [Abu-Lughod 1986: 161]、この文章は、セクシュアリティを悪の規範概念と理解すると分かりやすい。すなわち、ベールとは女性が、特定の社会システムの価値規範——ここではセクシュアリティが悪の規範概念とされ、セクシュアリティの拒絶を意味する貞節は善行とみなされる——に対して了解と服従を表明する手段なのである。

さらに、ベールの着用を社会システムへの服従とみなしたアブー＝ルゴドの解釈には別な疑問が湧く。確かに社会システムとの関連から行為を意味付けることは重要である。しかしベールから読み取れる社会システムへの服従と女性の貞節との関係は状況的であり、絶対的なものではない。むしろいかなる行為も社会システムの外部に存在し得ないとすれば、貞節の表明やセクシュアリティの拒絶に限らず、社会的期待に沿う全ての行為が社会システムに対する服従の表明と解釈されてもよいはずである。アブー＝ルゴドの服従に関する指摘は、全ての行為に当てはまる可能性を持つものにもかかわらず、セクシュアリティの拒絶や貞節を意味する行為だけを特別視

することへの批判的考察に欠けている。

メルニーシーやアブールゴドの議論は、女性を抑圧の被害者と抽象化することへの抵抗を意識していた。しかし女性とセクシュアリティとの緊密な関係に対する批判的な視座に欠け、女性身体の管理に関する現地の論理を無批判に持ち込んだ結果、男性に身体を管理される女性と、その根拠としての女性セクシュアリティという、中東ムスリム型の男性・管理、女性・抑圧という新たな男尊女卑の図式が意図せず生みだされたと見ることもできよう。

### Ⅲ 「交渉」の場としての女性身体

ところで前出のアブールゴドは、貞節とセクシュアリティとの関係だけでなく、女性たちがその関係にそぐわない感情を詩という形式で表現している事について詳述した<sup>5)</sup>。また70年代にカイロ、およびオマーンのソハールで調査を行った人類学者のヴィカンも、女性の評価を決定づけるものはセクシュアリティだけではないと主張した [Wikan 1984]。ヴィカンは、ソハールでは女性の外出の際に顔まで覆うブルカと呼ばれるベールと黒いマキシ丈のガウンの着用が必要とされること、初婚の花嫁の処女性が絶対視されること、女性による性的に不道徳な行いは最大の恥だと考えられることを報告した。しかし一方で、初婚でありながら非処女の花嫁や、婚外交渉を行った女性たちに、そうした事実を認識されていながら、社会生活において必ずしも悪い評価がされていなかったことに注目した。そうした女性は過ちを犯したとみなされるが、その過ちだけが個人の評価を決定づけてはいなかったとヴィカンは述べる。ヴィカンによれば、女性の性的貞節は重視されるが、貞節以外にも、女性を評価する様々な基準があったという [Wikan 1984]。

アブールゴドやヴィカンらの詳細な民族誌により、女性セクシュアリティに過度の重要性を見出す姿勢や、イスラームなどのイデオロギーを主な研究対象としていたそれまでの中東ジェンダー研究の偏りが浮き彫りにされた。そして、男性中心的な公の言説が色濃く反映されたそれまでの分析から、女性が生きる現実を対象とした考察が試みられるようになった。具体的には、イデオロギーにジェンダー理解を探ることに批判的な立場に立ち、多様で複雑な行為実践としてジェンダーを記述する方法が模索されるようになった。女性をとりまく重層的に絡み合う様々な言説や、それらに規制されながらも巧みに利用し資源化する女性たちの姿をどのように記述すべきか。こうした取り組みのなかで使われるようになったのが「交渉」——衝突や抵抗ではなく、異なる見解が懐柔、譲歩、適応、利用、そして混ざり合い変化すること——という概念である。そこで意図されていたのは、個人の行為や相互行為のもつ幅や多様性と、行為者による意味づけや意図の描写である [Mehdid 1993]。本節ではこの「交渉」という概念に注目し、エジプトの女性身体を扱った民族誌的研究における「交渉」の捉えられ方や、概念の多義性に注目し、異なるアプローチにみる貢献や課題を整理しながら、女性身体に関する知見を概観する。

#### 1 ジェンダーイデオロギーの解釈に見る「交渉」、ドレスコードと就労のトレードオフ

第一に取り上げるのが、ジェンダーイデオロギーの実践解釈に「交渉」を見るアプローチである。政治学者のマクラウドと社会経済学者のフードファーは、ベールという行為を、伝統的なジェンダーイデオロギー (traditional gender ideology) と経済イデオロギー (economic ideology) の狭間で行われる、女性役割の「交渉」として分析した。この伝統的なジェンダーイデオロギーとは、性別役割分業、男女の空間的隔離、婚姻外の性交の禁止など、主にイデオロギーを対象とした研究で中東のジェンダー規範として研究者が論じてきたものである。一方経済イデオロギーは、経済発展を至上命題とし、労働力としての女性による家庭外就労を奨励するイデオロギーとして、女性本来の居場所を家庭とみなす伝統的なジェンダーイデオロギーと対立する。こうしたジレンマの中で、積極的かつ戦略的にジェンダーイデオロギーを利用し、労働市場に参入する女性たちの姿を著者らは、「交渉」という概念を用いて描写した。

マクラウドは、エジプト都市部の下層中産階級を中心として80年代後半に始まった新たなベールの流行を「新ベール現象<sup>6)</sup>」と呼び、その意図はイスラームや伝統的な生活スタイルへの純粋な回帰ではなく、「同調的抗議 (accommodating protest)」だと述べた [MacLeod 1991]。同調的抗議とは、女性が妻や母といった伝統的な

女性役割を受け入れ、見返りとして保障されるはずの女性としての尊厳や経済的分配を要求する抗議表明を指す。生活のために外に働きに出る女性がベールをまとうのは、伝統的な女性の領域を離れながらも、伝統的な価値観が女性に保障するはずの権利を要求することだという。マクラウドによれば、これは過去や伝統への退行ではなく、近代的なムスリム女性の創出という名の下に、女性が伝統的なジェンダーイデオロギーの解釈に改変を試みる「交渉」である。この「交渉」において、女性は家族のための献身と伝統的なドレスコードの遵守を引き受け、その代わりに家庭外での就労の許容を要求していたと著者はみる。

また90年代初頭、カイロの労働者階級を対象に女性のベールを考察したフードファーは、ベールを経済資源獲得のための「交渉」道具として分析した [Hoodfar 1991]。フードファーの調査対象者の多くは男性の稼ぎを補うため家庭の外に収入を得る道を探る女性であったが、彼女たちは伝統的な性別役割分業に反することを恐れていた。著者によれば、家庭外での就労は女性の貞節が問われ、伝統的な性別役割分業が男性に課す女性の経済的扶養義務に摩擦を生む行為である。ベールはこうした状況下で、伝統的なジェンダーイデオロギーに対する従順さの表明や、男性の感情的反発を抑える効果をもち、被扶養権と収入の両方の獲得を可能にしたという。ベールの着用は貞節を重視する伝統的なジェンダーイデオロギーに対する従順を意味し、女性たちはその対価として女性としての名誉や尊厳を保持し、家族との衝突を緩和し、さらには男性に扶養を請求できるという。

マクラウドとフードファーは、ベールを伝統的なジェンダーイデオロギーを受け入れるという意味表明として、またジェンダーイデオロギーの解釈をめぐる意識的な取引の一つとして考察した。この取引では、女性が家庭外での就労を要求する一方、管理されるべき対象として女性身体をみなす伝統的なイデオロギーを積極的に受け入れていたことが明らかになった。この考察の意義は、第一に女性たちの姿が、意思をもち選択を行う生身の存在として可視化されたこと、第二に、女性役割をめぐるイデオロギー間の衝突を描くことで、女性に関する複数のイデオロギーの存在を指摘し、特定のイデオロギーを考察するだけでは現実におこる現象は理解できないことを確認したことにある。そして最後に、イデオロギーには解釈の幅があり、実際の行為を考察する際、解釈が行われた特定の時間や場 (time and space specific) を文脈化することの重要性が意識されたことにある。しかしながら、ジェンダーイデオロギー解釈の改変要求という「交渉」の考察からこのような知見が導きだされる一方、伝統的なイデオロギーの受容というもう一つの「交渉」には十分な関心が向けられていない。そのため、著者らが伝統的なジェンダーイデオロギーと称したものの丹念な描写や批判的検討が行われていない。この点で、女性身体とセクシュアリティとの関係性を強調する旧来の分析傾向が受け継がれていると見ることができる。イデオロギー解釈がもつ幅や多様性を描くことには成功したものの、イデオロギーそのものには分析が及ばず、従って、女性を女性身体の性的器官・機能に還元する論調が無批判に引き継がれたと言える。この問題を回避するには、イデオロギーの解釈だけでなく、その内容に踏み込んだ分析がされるべきであった。

## 2 社会的価値の「交渉」、伝統的ジェンダーイデオロギーの戦略的利用

同じくベールの考察から、現地に流通するジェンダーイデオロギーの脱構築を試みた研究も行われた。例えば人類学者のワーナーは、社会的地位が「交渉」される場として身体を捉え、女子大生のベールを集团的アイデンティティ形成という観点から考察した。ワーナーによれば、エジプトの新興中産階級層の女性にとってベールとは、社会的価値の「交渉」戦略の一つである [Werner 1997]。すなわち、経済的な豊かさでも、西洋近代的な価値観の体現でもブルジョワ層に及ばない新興中産階級の女性が、自らの道徳性の高さを主張するためにエジプト固有の独自の文化的価値として女性の貞節や処女性を引き合いに出し、その象徴としてベールをまとい始めたという。そしてベールの着用、主婦志向の強調、さらに女性の性的貞節の重視を唱え、女性たちが自らを男女の境界をわきまえた道徳的な存在としてアピールするイデオロギーをワーナーは「新家父長制主義 (New Patriarchalism)」と名づけた。ワーナーによれば「新家父長制主義」とは、伝統的な価値観ではなく、エジプトのナショナリズムや市場主義経済の影響を強く受けたジェンダーイデオロギーだという。この現象は、80年代に始まったサダトによる門戸開放政策以降新たに中産階級に参入したグループの女性によって担われた。彼女たちの狙いは、ブルジョワ層のもつ西洋近代的な価値観を、イスラームや伝統を忘れた墮落の象徴として糾弾し、同時に自らはイスラームや伝統といったものへの尊敬を顕にすることで、自分たちの社会的地位を相対的に向上させ、強固なものにすることにあった。なかでも若い女性たちは、女性が職場で男性と対等に活躍する姿、男女交

際、肌の露出が多い西洋的な服装を非難し、自分はベールをすることで自らの文化的正当性を訴え、社会的地位の向上を図ったという [Werner 1997: 183]。

ワーナーが「新家父長制主義」と名づけたイデオロギーは、貞節や処女性といった概念により女性を性的機能・器官に全体化する、メルニーシーやアブールゴドが描写したイデオロギーと似通うが、ワーナーはそのイデオロギーを、社会的地位向上をめざす女性たちが動員した言説実践の構築物として分析した。ワーナーの功績は、従来の研究で地域固有の伝統として不問に付されがちであったジェンダーイデオロギーも、特定の時間と場に固有で、恒常的に変化することを明らかにした点にある。そこでは中東のジェンダーイデオロギーという抽象度の高い概念も、具体的な考察を要する研究対象であることが明確に示された。ワーナーの議論によれば、主婦への高い評価、処女性の重視、ベールの着用は、脈々と受け継がれてきたものでもこの地域における普遍的な価値観でもない。それらはむしろ人々が言説を利用するなかで偶発的に形成され、強調された女性観である [Werner 1997: 187]。しかしながらワーナーの研究には、「新家父長制主義」的イデオロギーのもつ系譜が分析されていないという課題が残る。確かに「新家父長制主義」はいわゆる伝統的なジェンダーイデオロギーとは異なるものであったかもしれないが、全てオリジナルでもなかったはずである。むしろその新しさは、処女性や女性身体の管理の重要性を強調するイデオロギーが、当事者としての女性自身によって、西洋近代的なイデオロギーの上位に配置されたこと、しかもその目的が女性自らの社会的地位の向上だったという点にある。しかしその系譜的特徴に関心を向けず、構築的だがリアルなものとして処女性、家庭における女性役割、女性身体の管理の重要性を描いたとすれば、それは固定的なジェンダー観の再生産ともなり得る行為である。ジェンダーイデオロギーの構築性を考察するのであれば、イデオロギーのもつ歴史や系譜をも考察に含めるべきであった。

### 3 自己同一化に見る「交渉」

従来の研究が、イデオロギーの複数性や解釈・実践の多様性を描くことを通じて女性をセクシュアリティや性的器官・機能に矮小化する傾向に抵抗を試みていたとすれば、以下の2つの研究は、身体研究の分野で発展した理論を援用することでそうした固定的なジェンダー観に抵抗を試みたと評せよう。例えばバショウニーは「女性身体は、様々な伝統、規律、そして概念的な見解が、豊かで、変化に富んだ、複雑な方法で交錯するアリーナである」と見る立場から、女性身体に関する複数の言説の衝突・「交渉」を個人の自己同一化との関係から論じた [Basyouny 1997: 123]。

バショウニーは、現代カイロの肥満を糾弾する言説と肥満に悩む女性たちの語りを考察し、そこに身体をめぐる問題が凝縮されていると分析した。その問題とは、女性身体の物化、身体の医療化、そして西洋近代的な身体観に価値を見出すヒエラルキーの浸透である。女性身体の物化とは、欲望対象としての魅力のみを基準に女性身体を語る言説が影響力を増すことである。身体の医療化とは、身体や身体にまつわる現象を語る上で西洋近代医学的言説に特権性が付され、それ以外の言説が排除されることである。バショウニーは、こうした現象の裏に、西洋近代的な身体観をより優れたものとする価値観の浸透があり、女性身体の魅力や身体の健全さを語る上でも西洋近代的な価値観が基準とされつつあると指摘する。バショウニーによれば、90年代以降、肥満がエジプトの社会問題に発展するなかで、かつて理想的とされた女性の豊かな体形は、健康や美容といった観点から非難の対象とされ、性的な魅力に欠け、不健康で、自分自身を管理できないことを証明するものとして、女性の自己同一化における大きな負の指標とされるようになったという。

また人類学者のガンナムは、女性の美容言説・実践における世代や学歴、識字の影響を考察し、個々の女性の自己同一化の過程では、「美の探求」という形で女性身体をめぐる複数のイデオロギー間の「交渉」が行われていると分析した [Ghannam 2004]。ガンナムによれば、グローバル化により商品や情報の移動が加速したことで、カイロでも新たな「望まれる身体 (desired body)」の構築が進んでいる。ガンナムは自ら進んで様々な美容方法を試す少女を描写し、社会集団に管理される女性身体、という固定的な女性身体への理解に疑問を付す。ガンナムはとりわけ教育やマスメディアの影響力に注目し、それらは従来女性身体の管理の主体とみなされてきた社会集団とは離れたところで、身体にまつわる様々なイデオロギーを女性たちに提供していると主張した。しかしまた、少女が医者や友人といった周囲の人々の意見に過度に反応していたとも指摘し、その反応から、少女は美容行為の効果やその行為の社会的適切さを、他者を通じて確認していると解釈した。ガンナムによれば、他

者による確認というプロセスを経ることで、少女の身体と自己には社会集団の価値観が常に反映されるという。

バショウニーやガンナムが「交渉」として描いたのは、自己同一化と、言説やイデオロギー間における優劣をめぐる戦いの二つである。自己同一化に注目し、そこに言説間のインターアクションを見出したバショウニーやガンナムの研究は、複数のイデオロギーを同時に流用しそれに適応する存在として個人を描き、そこで利用され、生み出される間主観的なものとしてイデオロギーを考察することで、個人とイデオロギーとの関係をより複雑で多様なものとして捉えることを可能にした。また「交渉」の主体にイデオロギーを想定した著者らのアプローチは、それ以前の「交渉」を扱った分析とは明らかに異なり、イデオロギー自体の変化を対象とした考察の可能性を開くものとも言えよう。しかしその一方で、考察対象を自己と身体に絞るあまり、全ての現象が個人的な経験として描かれるにとどまり、「交渉」が行われている社会状況についての検討に欠けるという限界がある。例えばガンナムは社会集団という存在と個人との関係について論じていながら、社会集団がもつ規範やイデオロギー解釈については一切触れていない。そのため、現代カイロという時間と場の独自性が明確に現れず、せつかくの自己同一化をめぐる個々の戦略も、その意味を正確に読み取るための社会的文脈と切り離された印象が残る。身体を自己同一化のアリーナとして見ているにもかかわらず、個々人の意思や意図の解釈が説得力をもって提示され得ていないという矛盾が生じているのである。この課題を乗り越えるためには、たとえ個を対象とした考察であっても、その理解の軸として、個が存在する社会集団について精密な考察を行うことが必要だと言えよう。

#### IV 結語、固定的な身体観を超えるために

ジェンダーを一貫した一枚岩とみなすことへの反省から、1980年代以降、中東地域を扱う研究でもジェンダーの多様性や行為者の意図に重点を置いた考察が行われてきた。本稿では、その動きの中で注目された「交渉」概念を鍵に先行研究をレビューし、中東、とりわけエジプト研究における女性身体の処遇を概観した。メルニーシーやアブールゴドの研究の検討では、中東のジェンダー規範の核だと研究者もみなしてきた女性身体の管理には、女性をセクシュアリティや性的器官・機能において全体化する、特定の女性観が埋め込まれていたことが示された。そして、90年代以降の研究の分析からは、男性による女性身体の管理を自明視する認識に対する様々な抵抗の手法が明らかになった。マクラウドとフードファーは女性身体の管理の方法に多様性を見出し、イデオロギーと行為との間にある解釈と、そこに顕れる人々の意思や行動の多様性に目を向ける重要性を指摘した。またワーナーは、女性身体管理の必要性を唱えるイデオロギーを恣意的な構築物として分析した。そしてバショウニーやガンナムは女性身体を自己同一化のアリーナとして分析し、グローバル化が女性身体へ及ぼす影響を考察した。これらの手法は、女性身体の実相を分析するうえで非常に重要なものである。

しかしながらいずれの研究も、男性による女性身体の管理や管理される女性身体という固定的な女性身体観を十分に解体できたとは言い難い。マクラウドやフードファーは、それを伝統的なジェンダーイデオロギーの一部として記述し、ワーナーは管理もまた言説実践の構築物とみなしながらも、その実態や根拠とされる言説について詳細な考察をしていない。そのため彼女らの研究には、女性身体の管理の重視と、その根拠を女性のセクシュアリティや性的器官・機能にたどる論調が無批判に受け継がれた。ワーナーの考察した女性たち自らがこの論調を利用していただけからわかるように、その論理は現地においては馴染み深いものであり、それだけに上に挙げた著者らにとって自覚的に批判することが難しいものであったと考えられる。またバショウニーとガンナムの研究は、女性身体の管理への抵抗を強く意識しすぎたあまり、現地の文脈ともども管理の実態を意図的に考察から除外したことで、女性身体の実相、とりわけ身体に付与される社会的な意味づけの描写の厚みに欠けるものとなっている。

女性身体を初めから管理の対象とみなす単純な見解に抗い、その実相を的確に捉えるためには、身体管理の根拠を女性の性的特徴に求める論調の批判的な検討が肝要である。メルニーシーやアブールゴドの研究の検討が示したように、女性身体の性的特徴や性的意味合いを自明視し、それを根拠に女性身体の管理を説明する論理はトートロジーであり、説得力を持たない<sup>7)</sup>。言うなれば、女性身体の管理を自明視する見解や、セクシュアリティにおいて女性を全体化する見解に抗う上で重要なのは、女性身体はなぜ管理されるのかと問うことではない。必要なのは、女性身体は管理されているとする言説も含めた、身体に付される意味付けや、女性身体を取り巻く現

象の一つ一つを批判的に検証することである。この作業において、先行研究でも用いられてきた「交渉」は、絶え間ない相互行為の流れの中から、個々の行為を特定の時間と場という文脈の要素を削ぎ落とすことなく現前化させることができる概念として重要であろう。ある行為を「交渉」として捉えることは、諸行為のあり方や意味合いを問い直し、読み替え、再定義する契機として現象を包括的に描く可能性を開くものである。

## 註

- 1) 本稿におけるベールとは、ムスリム女性がイスラームの遵守を意識し、頭髮を隠すことを目的に、頭に被せる布を指す。
- 2) 例えば後藤は、90年代後半から2000年代にかけてカイロで人気を博した説教師による女性のドレスコードに関する説教を分析し、この傾向が複数の説教師にみられることを指摘した [後藤 2005]。
- 3) 本稿ではジェンダーを、異性愛を前提としたセクシュアリティに基づいて語られる格差や役割と定義する。詳しい議論についてはバトラー [1999] を参照されたい。またその際のセクシュアリティは、「性器結合に直接関連する行動と観念、性器結合にいたるプロセスのなかでの行動と観念（中略）、および性器結合から結果する行動と観念」 [松園 2003: 7] と定義する。
- 4) 原文ではmoral. 'aqlというアラビア語の単語は、理性、知性、心情、精神として訳されることから、ここではあえて原理や原則といった意味合いを想起させる道徳という言葉をあてず、モラルと表記した。
- 5) アプー＝ルゴドはこの後、セクシュアリティというカテゴリーを用いて女性たちの行為を記述することに批判的な立場をとるようになった。
- 6) マクラウドは「新ベール現象 (New Veiling)」と名づけることで、20世紀前半までエリート階級を中心に着用されていたベールや70年代後半高学歴層の女性たちにイスラーム主義運動と連動して広まったベールとの差別化を図った。
- 7) 筆者は、フィットナやセクシュアリティを通じて女性に付される負の評価は、女性身体管理の根拠ではなく、むしろそのための装置と捉えた方が、理解しやすいと考えている。

## 参考文献

- Abu-Lughod, Lila. 1986. *Veiled Sentiments: Honor and Poetry in a Bedouin Society*. Cairo: The American University in Cairo Press.
- Basyouny, Iman Farid. 1997. *Just A Gaze, Female Clientele of Diet Clinics in Cairo: An Ethnomedical Study*. Cairo: The American University in Cairo Press.
- ジュディス・バトラー、竹村和子訳、1999『ジェンダー・トラブルフェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社
- Cook, David. 2003. *Studies in Muslim Apocalyptic*. Princeton: Darwin Press.
- Egypt Today*. 2003. (<http://egypttoday.com/article.aspx?ArticleID=7123>) 2009年8月13日
- Euromonitor. 2005. "Egypt: Sales of Cosmetics and Toiletries (Value)," in *Consumer Middle East 2006*. London: Euromonitor International, p.212
- . 2000. "Egypt: Sales of Cosmetics and Toiletries (Value)," in *Consumer Middle East 2001*. London: Euromonitor International, p.235
- Ghannam, Farha. 2004. "Quest for Beauty: Globalization, Identity, and the Production of Gendered Bodies in Low-income Cairo," in Hania Sholkamy and Farha Ghannam (Eds.), *Health and Identity in Egypt*. Cairo: The American University in Cairo, pp.43-64.
- 後藤絵美、2005「現代エジプトと『ヒジャーブ』——ヴェール着用の宗教的根拠をめぐる議論から見えるもの——」『アジア地域文化研究』1: 88-113
- Haddad, May. 1988. "Women and Health in the Arab World," in Nahid Toubia (Ed.), *Women of the Arab World: the Coming Challenge*. London and New Jersey: Zed Books, pp.93-97.
- Hoodfar, Homa. 1991. "Return to the Veil: Personal Strategy and Public Participation in Egypt," in Nanneke Redclift and M. Thea Sinclair (Eds.), *Working Women: International Perspectives on Labour and Gender Ideology*. London and New York: Routledge, pp.104-124.
- Hussain, Freda, and Kamelia Radwan. 1984. "The Islamic revolution and women: Quest for the Quranic model." in F. Hussain (Ed.), *Muslim Women*. New York: St. Martin's Press, pp.44-67.
- MacLeod, Arlene Elowe. 1991. *Accommodating Protest: Working Women, the New Veiling, and Change in Cairo*. Cairo: The American University in Cairo Press.
- Malti-Douglas, Fedwa. 1991. *Woman's Body, Woman's Word: Gender and Discourse in Arabo-Islamic Writing*. Cairo: The American

University in Cairo Press

Mehdid, Malika. 1993. "A Western Invention of Arab Womanhood: The 'Oriental' Female," in Haleh Afshar (Ed.), *Women in the Middle East: Perceptions, Realities and Struggles for Liberation*. London: Macmillan, pp.18-58.

松園万亀雄、2003「総説 性を文化の脈絡で考える」松園万亀雄編『性の文脈』雄山閣、3-22頁

Mernissi, Fatima. 1975. *Beyond the Veil: Male-Female Dynamics in Modern Muslim Society*. London: Al Saqi Books. p.41

Werner, Karin. 1997. *Between Westernization and the Veil: Contemporary Lifestyles of Women in Cairo*. Bielefeld: Transcript Verlag.

Wikan, Unni. 1984. "Shame and Honour: A Contestable Pair," *Man: The Journal of the Royal Anthyropological Institute*. 19(4): 635-652.